

「なぜいじめは起きるのか？」

2013年1月19日(日)

会場：カフェ ALBA

参加：12名

司会・文責：堀越

1. 概要；

- ・新規1名を含む総勢12名の参加者で、いじめがなぜ起きるのか、主にいじめる側の視点に立ってその心理的な観点から議論した。

2. 議論；

(0) テーマについて

- ・昨年11月「人はなぜ集団でいることに価値を見出すことがあるのか？」の例会は、ある意味で負の側面とされる「いじめ」を除外し、主に正の側面のみを議論した。負の側面を置き去りにしたままでは片手落ちなので、今回は「いじめ」をテーマとして提起した。

(1) 鬱積する不満が原因ではないか？

- ・Hさん；人は本来自由であるはずなのに、常に何らかの制限を受けていて自由とはならない。そういう矛盾は(言わば自分勝手ではあるが)不満となり鬱積する、ニーチェの説くルサンチマン*1)のようなものが背景や動機にあるのではないか。

*1) ルサンチマン；他者の不当な振る舞いにすぐに反発できずに、じっと我慢する人間のうちに、やがて次第に鬱積してくる不満の感情のことを指す。

(2) 対象はどうやって選択されるのか？

- ・他者と何らかの異質性を示すと対象となるが、そこには合理的な理由はなさそうである。
- ・輪番制のように順番に対象がくるくる回る場合もあり、その異質性には合理性はない。

(3) スケープゴートが必要なのではないか？

- ・Yさん；会社の同僚同士で気に入らないある上司の悪口を語り合ったことがあるが、その同僚同士の中ではうまくいくことがある。この気持ちこそが、いじめたくなる気持ちの芽ではないか。
- ・自分は他の多数とある同質性を共有し、その同質性を維持したいと願うのではないか。
- ・自分が一番下位に位置づけられることは嫌なので、自分よりも一段下の存在を求めるのではないか。
- ・Aさん；自分は何者か分からないが存在している*2)状況にあり、常に不安である。その不安を解消するために、他者との同質性を確認したくなり、異質な対象を作り出す。その対比の中で、その他の多数との同質性を確認し、最後は安心したいのではないか。

*2) 存在了解：私達が既に事実として有している大まかで漠然とした了解：「人間（私）がいる（ある）」を指す。

(4) 集団内人数の最適化が起きるのではないか？

- ・集団には最適な人数があり、それを超えると排除の動きが発生して、自然と調整するのではないか。
- ・最適人数による排除の論理が正しければ、地球規模で起きている人口増の理由を説明できないのでは？
- ・ここで語っている集団は、ある特定の集団なので、地球規模へ拡張はできない。

(5) いじめる人から考えると？

- ・いじめる人は自信がなく弱い人であるため、フラストレーションが溜まるためではないか。
- ・フラストレーション解消が目的なら、その方法は他にもあるので、いじめでなくてはならない必然性はないはず。
- ・いじめる側では、いじめ自体をコントロールできない。一方、いじめられる側は、集団を離脱できない。そのため、それ以外の人がいじめを「おかしい！」とすることができるかどうかが鍵となる。

(6) 差別の構造と似ていないか？

- ・対象となる人が全く同質性を持たない異質者の場合は、いじめの対象とはならないのではないか。その意味では、差別対象と同じ構造があるのではないかと進行から提起した。差別もいじめもその対象は、同質性がありながらも少しだけの異質性がある、言わば曖昧な対象であり、その曖昧さを排除しようとするのではないか。

3. まとめ；

- ・いじめに関して、いじめる立場の心理的な分析（鬱積する不満、自己の存在了解と確認）、集団の人数自動調整、差別との対比等の構造的な分析まで議論できた。テーマ提起者としては「いじめの芽は悪口にある」という点が発見であった。「いじめは笑いに通じる」という観点と同様に興味深く、また議論してみたい。

以上